

光明寺だより

第111号
浄土真宗本願寺派
光明寺

〒793-0030 西条市大町550

TEL 0897-53-4583

心に残る詩



力士のインタビュー 岸本満雄 (74)

金星

おめでとうございます

ハーツハーツハーツ

勝った瞬間

どんな気持ちでしたか

ハーツハーツハーツ

あの立ち合いは前から

考えていたのですか

ハーツハーツハーツ

今場所の目標を

聞かせて下さい

ハーツハーツハーツ

ありがとうございます

産経新聞「朝の詩」より

私たちのちかい

一、自分の殻からに閉じこもることなく

穏おだやかな顔と優しい言葉を大切にします
微笑ほほえみかける仏さまのように

一、むさぼり いかり おろかさろかさに流されず

しなやかな心と振る舞いを心がけます
心安らかな仏さまのように

一、自分だけ大事にすることなく

人と喜びや悲しみを分かち合います
慈悲じひに満ちた仏さまのように

一、生かされていることに気づき

日々ひびに精一杯せいいつぱいつとめます
人々の救いに尽くす仏さまのように

一口法話

お法事での話



私はお法事でよく次のようなお話をします。亡くなられて直近のお法事(四十九日法要)と、三十三回忌などの古いお法事ではおのずとその内容は変わりますが、今回は亡くされてすぐのお法事(四十九日法要)を例に挙げてみたいと思います。

本日はご当家ご主人の四十九日法要でした。改めましてご主人のご逝去に、心からお悔やみを申し上げます。まことにご愁傷さまでございます
ご遺族の皆さんにとって身近な方とお別れは、殊の外寂しい思いをいたされおられることと思います。

お釈迦様は、私たち人間がこの世に生まれた限り、避けては通れない苦しみが八つあると説いておられます。そのうちの一つに『愛別離苦』という苦しみがあ

りますと仰っています。

『愛別離苦』とは愛する人、身近な人、大事な人、そういった方とお別れせねばならぬ苦しみです。それがどんな形にやってくるかも分からないけれども、人間として生まれた限り、その苦しみは避けては通れませんが、とこう仰っています。

今、ご遺族の皆様方はまさにその苦しみの真つ只中にいらっしやるところであります。先立って逝った方が大切な人であればあるほど、残された方の心に受ける傷は計り知れないものがありであろうと思えます。その心の傷を癒すにはある程度時間が必要であろうかと思えます。

ただ、ここでご遺族の方にとって大事なことは、この度の「お別れ」、「死」ということをいかに受けとめ、これから的人生をどのように歩んでいくか、そのことが一番問われていることなのです。

お念仏の教えを頂きますと、私たちは亡くなりますと阿弥陀さまのご本願のハタラクで直ちに成仏―仏様にさせて頂くのです。

これは阿弥陀さまの約束事でございま

すから方に一つも狂いはありません。必ず、間違はなく、確かに、成仏させて頂くのです。

ご当家のご主人もすでに阿弥陀さまのご本願のハタラクをいただいて、すでに仏様になられておられます。

仏様には大きな願いがあります。

それは「かけがえのないあなたそのいのちを精一杯輝かせて、悔いのない人生を送ってください。」という願いです。

ご遺族の方はその願いをしつかりと聞き届けながら、この人生を歩んでいく、それが残された方に課せられた使命なのです。

言うまでもありませんが、私たちの人生は一度きりです。やり直しができません。お経には「老少不定」と説かれていますように、若者が先に亡くなるのか、お年寄りが先に亡くなるのか、定まっていな(不定)いのです。また「身自受之、無有代者」(身、自らこれを受くるに、代わる者あることなし)とありますように、いくら辛くても苦しんでも、誰も変わってくれる者はいません。つまり私の人生は私の責任において果たしていかね

ばならないのです。まことに厳しいですが人生はそういうものです。そうして最も大事なことは私のこの「いのち」はすべて頂きものだとということですか？

どなたから頂いたのですか？

無量寿)のハタラクをいただいているということになります。

それだけではありません。そのいのちが私のところに届くためには、そのいのちを支えていた人々がいたはずで、その人の支えも必要でした。この人の支えも必要でした。そればかりか見も知らぬ人々の支えもあつたはずで、そういう支えて下さった人々を「光」と仰いだら文字通り「無量光」のハタラクをいただいているのです。

この無量寿、無量光のことをインドの古い言葉でアミダ(阿弥陀)というのです。つまり私たちはアミダというハタラクをいただいで、今この人生を歩んでいるのです。

故人が「あなたのそのいのちを精一杯輝かせて、この人生を歩んでください」と願っているのは、「あなたのそのいのちは、無量寿・無量光というとても大きい大きなめぐみと、おかげをいただいた「いのち」なのです。早くそのことに気づいてくださいということなのです。

そうしてその故人の願いにかなうような人生を歩むことが出来た時、初めて「先立ったあの方は、私の心の目を覚ますた

めにこの世に現れて下さった仏様だったんだなあ」と心の底から手を合わせて拝むことができるようになるのです。

私の心の目を覚ますお方、それを仏教では「善知識」と申します。まさに先立つ方は私の善知識なのです。

どうか、この度の悲しみを悲しみだけに終わらせない、そんな尊い智慧ある人生を送って頂きたいと思えます。

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏

……

【参考】

★人間の苦(四苦八苦)

生苦・老苦・病苦・死苦

愛別離苦

求不得苦

五蘊盛苦

怨憎会苦

算していきますと、例えば三十代さかのぼりますとどのくらいの両親の数になるかと言え、何とその両親の数は十一億人になるのです。もちろんこれが「いのち」の始まりではありません。まだまださかのぼっていきますと、いのちの数はもう数え切れません。数え切れない「いのち」ですから「無量寿」と言えるでしょう。つまり私が今ここに存在している背後には、数え切れない「いのち」(

心に沁みる
はなし

太平洋ミクロネシア地域のパラオ島から船で一時間ほどのところにペリリュウー島という島があります。太平洋戦争中の昭和十九年、当時日本が守るペリリュウー島への上陸を目指すアメリカ軍4万5000人と1万1000人の日本軍がぶつかった激戦の地です。

圧倒的数的不利を予想した日本軍は、地下壕を張り巡らせ、隠れて戦うゲリラ戦略をとりました。日本軍の司令官は中川州男くわに大佐でした。

ペリリュウー島には850人ほどの島民がいました。島を治めていた日本人はパラオに道路を敷き、水道や電気を引き、病院や学校を作るなど、様々なインフラを整備しました。

島の人たちはそんな日本人が大好きになっていきました。アメリカ軍が攻めてくることを知った時、島民たちは話し合いました。そして「我々も日本兵と共に戦う」という結論を出しました。島の長老や責任者数名で中川

大佐を訪ねました。

ところが中川大佐はその申し出を歓迎するどころか彼らをにらみつけ、見下すような態度で言いました。

我々帝国軍人が貴様ら土人と一緒に戦えると思っているのか。帝国軍人を馬鹿にするな。足手まといだ。さっさと島から出ていけ」

島民たちはその変貌ぶりに驚き「これまであんなに仲良くしていたのに。やっぱり日本人もいざとなると我々を差別するのか」と失望し、泣きながら帰り、島の人々に報告しました。

島民たちは日本軍が用意した船に乗り込むと、パラオ本島に向かいました。

「いつまたここに帰ってこられるのだろうか。自分たちのふるさとはどうなるのだろうか……」

そんな不安な気持ちでペリリュウー島を眺めていると、ジャングルから日本兵たちが次々と飛び出してくるのが見えました。

みんな真っ黒に焼けて顔からこぼれ

んばかりの笑顔と白い歯を見せ「元気でな〜！」と叫び手を振りました。

中川大佐もその中にいて島民たちをちゃんと見送っていました。

このことによりペリリュウー島民は誰一人としてこの戦闘で亡くなることはありませんでした。

「何の罪もない島の人を戦いで殺すわけにはいかん」という思いから、中川大佐はあんな態度をとったのです。

昭和十九年九月のことでした。

仏さまが巧みな手立てを使って私たちを救う「善巧方便ぜんぎょうほうべん」とはこのようなものであるうと思えます。





京都市の北部に貴船きぶねという地区があります。そこは鴨川の源流になる貴船川が流れており、夏は川岸の料亭が川床を作り、多くの観光客で賑わいます。その貴船川の上流に貴船神社という「水の神さま」がまつられています。

貴船川は鴨川の源流ですから、日照りが続いて川の水が枯れるとたちまち下流の田畑の農作物に大きな被害が出て、京都の台所に影響が出ます。そういう時は貴船神社の「水の神さま」に雨乞いのご祈祷をします。昔から靈験れいげんあらたかな神様として知られている通り不思議と「ご祈祷すれば必ず雨が降る」のです。

なぜご祈祷すれば雨が降るのかと言えば、雨が降るまでご祈祷をするからです。

人々は「ご祈祷して雨が降った。よかった、よかった」と喜ぶそうです。雨が降るまでご祈祷すれば雨が降るのは当たり前なんですけど……



- ★誤送金待てど暮らせど来ぬ我が家
- ★お辞儀して共によるけるクラス会
- ★最近のモノの名前は全てあれ
- ★再会し老けたと言えず服を誉め
- ★金が要る息子の声だが電話切る
- ★朝起きて調子いいから医者に行く
- ★うまかった何を食べたか忘れたが
- ★忘れ物取りに戻ればまた忘れ
- ★アーんして昔ラブラブ今介護
- ★味のある字と褒められた手の震え



趣味の広場



俳句を楽しむ(九十)

森本隆を

十一月も中旬になり、各地から初冠雪や初雪のニュースを見る様になりました。冬紅葉もいよいよ最後の見頃となった今日この頃です。相変らずのコロナ状況に加え、今年はインフルエンザの流行も心配されているようですが皆さんはお変りなくお過ごしですか。

さて、俳句の世界でも冬と言えば先ず十一月の「お取り越し」や「報恩講」「御正忌」といった季語を詠み込んだ句が多い季節です。今年は仏様や仏教の世界とのかかわりの句を各季節にわたって見てきましたので、今回は同じ話題の冬の句を少し見ていきましょう。我が浄土真宗の開祖親鸞聖人が九十歳でお亡くなりになったのが旧暦十一月二十八日、この日の前後七日間にわたり修する法要が「報恩講」です。本山西本願寺では陽暦一月九日、十六日の間、とり行われます。その日取りを繰り上げて各地各寺院で早めに行うのが「御取り越し」ですね。ここ何年かコロナの流行で人の集まりが出来ず門徒としては止むを得ず在家でお念仏を唱えるしかありません。

仏恩や菜屑も捨てず御取越 石井 露月
松の雪払うてをるやお取越 野上けいじ
報恩講下駄をそろへて朝の齋 遊田 礼子

雨傘を横に払うて親鸞忌 桂 信子
どの句もあまり四角ばっておらず、この行事が人々の日々の暮らしに溶け込んで行われているのがよく感じ取れる、わかり易い句です。三句めの「齋」というのは「食事」の意味です。ここまでは、我が宗旨の話題でしたが、ここからは本来の広く仏様とか仏教の世界とのかかわりの句を見ていきます。

俗名と戒名睦む小春かな 中村 苑子
冬ぬくしかなしい時も仏笑み 菅原さだお
曼荼羅の地獄極楽しぐれたり 細見 綾子
極楽へ通せんぼうの雪が降る 中村 加代
寒に入る耶穌も仏陀も素足にて 新家生子
仏教がどれだけ日本人の生活に受け入れられ、日本人の心にしみ込んでいるかが強く感じられる五句です。あたたかい冬晴れの天気、しぐれや雪が降る日、いよいよ真冬の寒に入る頃、そういう日々の生活のふとした瞬間に仏様のお顔とか仏教にかかわるあれこれを感じ取って詠みました、という五句ですね。深刻さなどかけらもなくむしろ明るさのただよ句です。

次にもう少し人間味の感じられる句を。
一列といふ美しき寒念仏 浜田 一枝
み仏の煤は静かに払ひけり 桜井 静子
日向ぼこ仏掌の上にある思ひ 大野 林火
運慶の仁王の舌の如く咳く 野見山朱鳥
風邪ごえの住職が鐘撞きに行く 廣瀬直人
一句めから三句まで、仏様の世界に対して

静かに真面目に向き合っている人間の心を感じ取り易く詠んだ、落ち着いた美しい句です。四、五句の二句は人間が生きている上で、例えば風邪気味の時でもその事を巧みに俳句として詠み込んだ作品です。咳をしてる本人は大変なのでしょうがさり気なく五七五にまとめて一句にした所が大したものですね。

最後に私個人として冬の句で仏様からめて詠まれた俳句の中で最も好きな一句を掲げてみます。

み仏に美しきかな冬の塵 細見 綾子
お寺の本堂か、家の仏間かは判りませぬが、そこに射し込む一筋の冬の日の光、その中にただよう塵、これだけを材料に、仏様の慈愛の深さ、美しさを詠み上げた素晴らしい句です。

これからの厳寒期、皆さんにはご自愛の上、健やかで良い日をお送り下さい。



位職書作品



【字句】

神しん怡い心しん静せん

【意味】

精神が和らぎ楽しんで
心が静かになる

BOOK 本

『クイズ浄土真宗』



発行所 (株)探究者
著者 末本弘然
定価 1300円 + 税

本書は浄土真宗を教義編・仏事編・歴史編・雑学編に分類して、三択クイズ形式で100題が掲載されています。

なぜクイズ形式にしたのかと言えば、それは、生活から縁遠くなってしまった感のある仏教をもう一度私たちの元に呼び戻したい。そのためには一方的に著者が講釈を垂れるのではなく、読者自身も参加して、より身近に仏教を感じてもらいたい、そういう思いでクイズ形式にしたと語っています。

著者の末本氏は大阪大学卒業後、「本願寺新報」の記者を経て、清福寺住職に就任。その後、アジア仏教徒理事などを務め、仏教徒の国際支援活動などに取り組んでいます。

令和5年度年忌早見表

該当のお家には年忌通知表をお配りしてありますが、念のため早見表を参考に自宅の過去帳でご確認ください。

回忌	死亡の年号
1周忌	令和 4年
3回忌	令和 3年
7回忌	平成29年
13回忌	平成23年
17回忌	平成19年
25回忌	平成11年
33回忌	平成 3年
50回忌	昭和49年
66回忌	昭和33年
100回忌	大正13年
150回忌	明治 7年
200回忌	文政 7年
250回忌	安永 3年
300回忌	享保 9年

光明寺のホームページ

南岳山光明寺

検索



言葉のプレゼント

雑草という名の草はなく
害虫という名の虫もない

★次回発行予定…2月中旬

「光明寺だより」をご家族の皆さんで
お読みください



話題

★ご覧になられた方もおいでかと思いますが、10月19日、あいテレビの「よるマチ」という番組で光明寺のことが紹介されました。住職・前住職共に出演しました。

★昨春秋、光明寺で撮影したマツダ自動車の新車(CX50)の広告が折り込み広告などで出ています。

★コロナ禍のため、次年度の「お涅槃」・「新盆合同追悼法要」の開催の有無については本紙にてお知らせいたします。

★11月20日〜28日の日程でサッカーw杯がカタールで開催されました。以前、光明寺自治会に住んでいた長友佑都選手も選ばれ、町内の表通りに激励の横断幕が掲げられました。住職の子どもたちも一緒に激励している模様がテレビで放映されました。

